

ジッドとトルストイ

吉井, 亮雄
九州大学文学部

<https://doi.org/10.15017/9942>

出版情報 : Stella. 12, pp.1-13, 1993-03-20. Société de Langue et Littérature Françaises de
l' Université du Kyushu

バージョン :

権利関係 :



ジ ョ ッ ド と ト ル ス ト イ

吉 井 亮 雄

『書簡集から見たドストエフスキー』（1908年）の発表以降、ジョッドが一貫してトルストイとドストエフスキーとを対比的にとらえ、前者の小説美学を排し、後者のそれを重視・顕揚する発言をつづけたことは周知のとおりである¹⁾。これを反映して、いきおい研究者の関心も、彼がドストエフスキーの作品から受けた影響を分析することに集中してきた。トルストイの名が引かれることはあるにしても、それはもっぱら、ジョッドとは逆にこの作家を範とするマルタン・デュ・ガールに引きよせての言及にすぎず、その結果、ジョッドとトルストイとの関係そのものを中心におく論考は実質的に皆無という状況が今日にいたるまでつづいているのである²⁾。しかしながら両者をつなぐ接点は、活字化されたジョッド証言の直截や、研究者の言説の顕著な偏りが思わせるように、まったく存在しなかったのか。けっしてそうではない。不首尾に終わりはしたが、ジョッドはある時期、トルストイと個人的に親交のあったフランス人スラブ学者を介して、この文豪への接近をこころみていたからである。しかも計画のなりゆきは、外国文学を積極的に受け入れようとするジャン・シュランベルジェら「新フランス評論」初期グループの注目を少なからず集めていたと推測されるのである。本稿では、そういった経緯を、未公刊文献を含むいくつかの実証的資料にもとづいて確定し、あわせて一件の意味するところを同時代的なコンテキストのなかで検討する。

*

事実関係の叙述からはじめよう。トルストイが1910年の晩秋、生地トゥーラ県ヤースナヤ・ポリャーナから出奔し、リャザン・ウラル線の小駅アスターボヴォで病に臥し、その後まもなく82年の生涯を閉じたことはつとに知られるところだが、本稿があつかうできごとがおこったのはそのわずか数か月前の

ことである。すなわち、同年7月23日（旧暦7月10日）の彼の日記には「サロモンのもちこんできた空疎な、きどった作品『放蕩息子の帰宅』とミルのみごとな短編を読む」³⁾ という、短い、われわれの注意をひく記述がのこされているのである。記述にある「ミルのみごとな短編」とは、今日ではもはや名をひかれることさえ少なくなった作家ピエール・ミルの『傷ついた雌鹿』のことを指すが、さしあたりここでは関係がない。当然のことながら、関心はサロモンと、彼が持参したジッド作品『放蕩息子の帰宅』（以下『放蕩息子』と略記）にしぼられる。煩瑣ではあるが、以後の論述を容易にするために、これらにかんして多少なりとも実証的な説明をくわえておこう。

まず「サロモン」について――。正確にはアルフォンス＝シャルル・サロモンというが、日常生活・著作活動のいずれにおいても、プレノンをほとんどつねにシャルルとのみ名のつたため、この時代を専門とする研究者のあいだでも別のある人物と混同されやすい。というのは、彼は一時期、ポール・デジャルダンの組織する「真理のための同盟」（「道徳的行動のための同盟」が1905年末に改称）の主要メンバーのひとりとして活躍したが、そのデジャルダンの高等師範学校の同期に、やはりシャルル・サロモン（1859-1925）という、リセ・コンドルセで長らく教鞭をとった人物がおり、同じバリ在住ということもあって、知己もデジャルダンだけにとどまらず、しばしば重なることがあったからである⁴⁾。ここで問題となっているサロモンは、1862年生まれで、その母アデルと文豪の伯母アレクサンドラ・トルスターヤ伯爵夫人との交友関係を機縁に早くからトルストイ家と親交をむすび、一家からはもっとも信頼のおける外国人として厚く遇された。初期のヤースナヤ・ポリャーナ滞在ではトルストイ自身の教授によってその語学力に磨きをかけたほどである。「真理のための同盟」の活動からも窺われるように社会問題への関心がつよく、国際的な政治状況が困難な時代にあって、1936年に73歳で没するまで一貫して仏露間の社会的・経済的な橋渡し役をつとめたが、同時に学術的な貢献もけっして小さくはない。トルストイやツルゲーネフの諸作品を翻訳したほか、とりわけトルストイ没後にはその最晩年にかんする貴重な資料や証言・回想を発表している。また彼自身の晩年には膨大なロシア関係蔵書をバリのスラヴ研究所に寄贈するなど、フランスにおけるスラヴ学発展の歴史を語るさいにその名を逸することはゆるされまい⁵⁾。ジッドがこのような経歴をもつサロモンといつ、どのようにして知りあったのか、正確なところは未詳だが、遅くともトルストイに『放蕩息子』がもたらされる2か月前の1910年5月末には面識があったのが確実

(ジッドがサロモン宅を訪問)であり、またこのときが初対面ではなかったとしても、それ以前にさほどの年月が経過しているとは思われない⁶⁾。

『放蕩息子』について——。作品の内容・主題にかんしては後の論述でも言及せざるをえないが、執筆の経緯や出版時の反響など、そのほかの細かな情報は、筆者が先般公刊した校訂版と、それに先立ち発表した一連の論考に求められたい⁷⁾。ここでは、本件にかかわる付随的な情報として、トルストイ宅にもちこまれた版本の推定にとどめよう。『放蕩息子』ははじめ、ポール・フォールが主宰する季刊誌「詩と散文」の1907年3-5月号(6月初出来)に掲載された。このプレオリジナルからは推定50部の別刷が作成され、書誌学的にはそれが同作品の初版ということになるが、これらは非売品であり、ほとんどすべてが著者自身の個人的な献呈にもちいられた。それから1年半をへた1909年1月にジッドは、「ロクシダン」誌の編集長アドリアン・ミトゥールに、同誌を母体とする「ロクシダン文庫」から『放蕩息子』の大型贅沢版を出してもらえないかと打診する。この依頼にミトゥールは即座に応諾し、彼の秘書アルベール・シャボンが作家との事務的な交渉にあたっている。その後ジッドは表紙や本文印刷用の豪華紙をみずから選定するなど、細かな点にまで気を配りながら、年内の出来を心まちにしていたが、実際の発行は翌1910年1月下旬まで遅れた(ただし、表紙に印刷された年号は1909年のまま)。この大型本は、限定番号入100部のほかに、著者献呈用として無記番非売品がおそらく20部刷られたもようで、ジッドはこれらを、礼状や署名入り献本によって筆者が確認したかぎりでも、出来後まもない2月中旬から以後数か月にわたって、ポール・クロードル、アルチュール・フォンテーヌ、ポール・デジャルダン、アルベール・チボーデ、マルセル・レイ、アンリ・アルベール、ポール・ドゥルオ、エミール・ヴェラーレン、エドモンド・ゴス、フーゴー・フォン・ホーフマンスタールなどの友人や知己に送っているのである。このように第2版出来と時期的に符合すること、ジッド自身が一件に関与していたばあいでも、初版にかんしては残部(少なくとも、著者保存用をのぞき献呈に供しうる残部)が1910年時点で彼の手元に存在した可能性はきわめて薄いこと、そういった点を考えあわせるならば、サロモンがトルストイ宅に持参したのは第2版であったと見てまずまちがいあるまい。ちなみに、同版の準備段階でジッドは、プレオリジナル・初版のために自筆完成稿にもとづき複数部数作成されていたタイプ稿のうち未使用・未修正のものをもちいてテキストの見直しをおこなった。その結果、プレオリジナル・初版や後続各版には存在する数節が削除

されることになったのだが（『放蕩息子』のドイツ語訳を準備中のライナー・マリア・リルケが、1914年1月にジッドと面談のうえ翻訳の底本として同版を選んだのもこの点を評価したため）、ただし、これらの変更は作品の主題そのものに大きな影響をおよぼすものではありえず、したがってトルストイの感想が第2版独自の異文によって左右されたとは考えられない。

話題をヤースナヤ・ポリャーナにもどそう。トルストイ宅でのもようにかんして参照がもっとも容易な資料は、1年半後の1912年1月14日にサロモンから直接話をきいたロマン・ロランが友人のジャン＝リシャール・ブロックに宛てた書簡であろう。そこでは、トルストイが作品の朗読を聞きながら憤慨を隠せなかったさまが、つぎのように記されているのである。

わたしは午後をトルストイの古い親友2人、フランス人とロシア人とともに過ごしたところです。フランス人のほう〔サロモン〕がわたしに語ったところによると、彼はある日、自分が熱狂しているジッドのある作品（『放蕩息子』）をトルストイにもっていきました。芸術の新しいものが大好きなトルストイは、彼に耳を傾けはじめました。5分もすると、怒って叫び、朗読が終わるまで彼の怒りは鎮まりませんでした。それから、友人の意見にたいする敬意から、彼はまた本をとって、ひとりでそれを再読しましたが、この2度目の読書を彼はなおさらいらだてて終えたのでした。——そしてこのフランス人が、わたしの前で、トルストイがちっともこの作品を味わえなかったことに驚いている一方で、わたしは、トルストイがトルストイであることをやめることなくジッドを味わうと、ひとが一瞬でも信じえたことにさらにいっそう驚いていました。⁸⁾

ちなみに、書簡の記述は「わたしはいささかもジッドを批判しているのではありません。わたしが彼の名をひくのは、彼の才能それじたいのためです。彼の芸術は第一流のものでありうるからです。しかしトルストイの芸術とは相いれないものです」とつづく。抑制の効いたことば使いではあるが、青年期からトルストイを崇拜し、その「叙事詩」のなかに芸術の理想的な具現を見る『ジャン・クリストフ』の作者がすでにこの時期、ジッド作品にたいして違和感を抱いていたことを認めうる点でも興味ぶかい⁹⁾。

しかしながらこれだけの証言では、ジッド自身が一件にかかわっていたか否かは依然として不明といわざるをえない。したがって、問題の輪郭をいくらかでも鮮明にさせるためにはまず、上記書簡と内容が部分的に重複することをおそれず、少なくともジッド研究者によっては今日まで指摘されたことがない印刷資料を訳出引用しなければなるまい。その資料とは朗読をおこなったサロモ

ン本人による回想である。彼は後年、トルストイの生誕百年を機に刊行が開始されたいわゆる「記念全集」の「編集者」（おそらくは『日記』の該当巻を担当したN・S・ロジオーノフ）の問い合わせに答えて、ヤースナヤ・ポリャーナでのまようをつぎのように述べていたのである。

トルストイのすすめにしたがい、わたしは広間の円卓にむかってジッドの短編を通して朗読しました……。トルストイが作品を非難していることは、すぐにわかりました。「なぜだ」「どうしてなのだ」とことばをはさんで、わたしの朗読をさえぎったからです。あきらかに彼は憤慨していました。「〔ジッドは〕 どうしてこんな寓話をことづけるのだろう。ともかく本はわたしに置いていってください」。そういって彼は本をもち去りました。翌朝、彼は本をもってきて、「あなたの友人の短編を昨晚読みかえしてみました、ほんとうにつまらないものですね」といいました。わたしの記憶するところでは、作品にたいするトルストイの感想を知りたいというジッドの求めに応じて、その日のうちに彼に手紙を書きました。¹⁰⁾

現場に立ち会った当事者によるこの証言は、ある種の否定しがたい臨場感とともにトルストイの反応を生々しく伝えるばかりか、作品を持参したのがジッド自身の依頼にもとづくものであったことを語っている。

だが、後年の回想だから記憶の錯誤や無意識の潤色もありうる、とさらに疑うことも可能だろう。そういった慎重な、またしごくもったもな疑問にたいしては、これを解消し、同時にいっそう具体的な情報を提供する別の資料が存在するのだ。すなわち、サロモンがじっさいに朗読の翌日（新暦7月24日）ジッドに書きおくれた書簡がそれである。現在はパリ大学附属ジャック・ドゥーセ文庫に保管される未公刊資料だが、そこでは、ジッドの依頼どおりトルストイに作品をたしかにとどけたこと、また彼の願いを入れて、起こったことを忌憚なく伝える旨が明記されたうえで、仲介者自身の感想をまじえた報告が本題をなしているのである¹¹⁾。ただし、少なからぬ調査・探索にもかかわらず、筆者はいまだサロモンの遺産相続人の同定に成功しておらず、必然的にこの書簡の印刷公表許可を取得しえない。したがって、以下では記載テキストの直接的な引用ではなく、研究上の慣行にしたがい「パラフレーズ」による内容紹介にとどめるが、そのなかでサロモンはジッドにたいしておおむねつぎのように報告しているのである——トルストイはすぐに、サロモンが称賛していることはジッドも承知している『放蕩息子』を読んで聞かせるようにたのんだ。しかしながらサロモンは、トルストイに隠さず述べた賛嘆の念を彼にも分かち

もたせることができず落胆する。ジッドの物語のまさに古典的な美しさが彼には理解できなかったのだとは思いますが、サロモンはそのことにかんしてはべつだん驚いてはいない。彼が驚くのはむしろ、そこに表現されたさまざまな思想をトルストイが感じとっているとは思われなかったという点である。また、サロモンの友人のひとりで、トルストイのことをよく知っている者が朗読に立ち会っていたが、その友人の感じたところでは、伯爵は最近「家」を増築したので、だれもがそこに入り、そこで幸福を見いだすべきだと思われたのだろうということだった。サロモンの見るところでは、トルストイは晩年、秩序と教会の人——彼が考えだすところの秩序であり、彼が創るところの「教会」という意味でだが——になってしまった……。以上が、トルストイの予想外の反応を目のあたりにして、興奮いまださめやらぬサロモンがフランスにむけて書きおくれた報告だったのである。

ジッドが一件にふかく関与していたことはもはや疑えない。それどころかサロモンの書簡は、計画がまさにジッド本人の発案によったことを明確に証言しているのだ。もっとも、スラブ学者との会談がその契機となったことも、やはりまた疑いを容れまい。『放蕩息子』がヤースナヤ・ポリャーナにとどけられる2か月前にジッドがサロモン宅を訪れたことは先にも述べたとおりだが、そのおりに同行したジャック・コポーが、最近公刊された『日記』に5月26日付で、つぎのような興味ぶかい記述を残しているからである。

シャルル・サロモン（デジャルダンがわたしに紹介してくれた）がわれわれ、ジッドとわたしに、レフ・トルストイにかんする逸話をいくつか教えてくれる。〔…〕

ドストエフスキーはトルストイがもっとも称賛するロシア人作家である〔とサロモンがいう〕。するとジッドは問う——「あなたには、トルストイがドストエフスキーのことを理解しているという確信がおりなのですか」¹²⁾

この一節に報告されたジッドの反応が、2人のロシア人作家にたいして彼が抱く対立的評価に起因していることはいうまでもない。その意味では、評価の対象はまったく逆ながら、彼の反応もまたロマン・ロランのばあいと基本的にさほどかわるところはない。しかしながらここには同時に、サロモンの発言をいぶかりながらも、トルストイの人柄や思想をよく知る者の意見だけにあながち軽視することはできない、機会をえて自分の解釈の正否を確認したい、という種の実験的な精神が顔をのぞかせているのではあるまいか。そして、ジッドがつねに自らをドストエフスキーの傍らに位置づけていることを思えば、当

然の帰結としてその関心が、ほとんど等価な問いへ、すなわち彼自身の作品をはたしてトルストイは理解しうるのかという問いへと向けられていった、そう考えてもさほど大胆な推測であるとは思われない。

作品の選択についても一言しておこう。贈られたのが仮にほかの作品、たとえば主人公アリサが神への献身のために自己犠牲の道をえらび、その過度なるがゆえに死にいたる『狭き門』(1909年6月刷了)であったならば、あるいはトルストイの反応も違っていただろもしれまい。だが、少なくとも『放蕩息子』にかんするかぎり、ジッドが否定的な結果をつよく想定していたことは疑えない。トルストイの反応を「忌憚なく」教えてほしいというサロモンへの依頼表現がそう思わせるからだけではない。なによりも彼は、この作品が読者各人の倫理的・宗教的な基準に応じて、まったく相反する反応——熱烈な共感、さもなくば容赦ない断罪——をひきおこすことをすでに十分承知していたからである。じっさい、放浪の果てに「家」に帰った放蕩息子が末弟の新たな出立に手をかす物語の結末をはじめ、そこにもられた福音書解釈が、オーソドクシーに照らせば、かなり特異なものであることは否めない¹³⁾。にもかかわらずトルストイへの接近がこれをもってなされたのは、あえて反発の予想される主題をえらんで他者を測りたい、また同時にそれによって他者の理解をかちえたいという屈折したメンタリティー、敵対者たちからはしばしば「悪魔的」と罵られるジッド特有の両義的な要請のためだったといえるのではあるまいか¹⁴⁾。

*

いずれにせよ計画そのものは、この上ない仲介者をうるという偶然をきっかけに、すぐれて個人的な動機から発案されたと思われる。しかしながらジッドは、「新フランス評論」の中心メンバーのうち少なくともジャン・シュランベルジェにはある段階で計画を知らせていたのが確実で、ばあいによっては事前に意見を求めていたのではないかと推測される。膨大な関係資料を駆使したオーギュスト・アングレスの学位論文『アンドレ・ジッドと「新フランス評論」初期グループ』によれば、ジッドがこの年少の盟友に宛てた8月5日付の書簡で、「『放蕩息子』はヤースナヤ・ポリャーナで不評だった」¹⁵⁾と報告しているからである。ジャック・コポーやマルセル・ドゥルーアン(ジッドの義弟)、アンリ・ゲオン、アンドレ・リュイテルスら、そのほかの中心メンバーについては、たしかに現在のところ確証と呼べるものはないが、ジッドやシュ

ランベルジェとのきわめて緊密な信頼関係（それに保証された日常的な情報交換）や、いずれも新雑誌の編集に意欲をもやす者として外国文学、とりわけ同時代の外国文学によせていた関心の高さからいっても、彼らが最後まで一件について知られることがなかったとはむしろ信じがたい。たとえば、11月30日付コポー宛ジッド書簡の「先日サロモンがゲオンと昼食にやってきた」という記述からは、遅くともこの時点ではゲオンもまたサロモンを個人的に知っていたことが確実である。そして会食のさい話題となったのはまさにトルストイ死去のことであって、ジッドはサロモンにたいし「新フランス評論」にトルストイの追想記を書いてくれないかと打診するが、サロモンはトルストイ夫人への慮りを理由に時期尚早として辞退しているのである¹⁶⁾。こういった事情や人間関係から判断するかぎり、ゲオンやコポーがそれまでトルストイ宅での『放蕩息子』朗読についてなんら承知していなかったとは考えにくい。また、結局は執筆・掲載にいたらなかったものの、やはりジッドとコポーのすすめのもとにトルストイ追悼論文を準備していたドゥルーアンについても同様の推測が可能であろう¹⁷⁾。

メディアの急速な発達・拡大にともない、共時的・越境的な「世界文学」がますます身近なものとなってきた現在では当然しごくのことと見なされがちだが、初期「新フランス評論」の活動のなかで一般の耳目をもっともあつめた新機軸のひとつが、外国文学の積極的な受容・紹介であったことはあらためて強調されてよい。じっさい、ドレーフェス事件以後の過渡期を覆った政治＝文学的論議の風潮や、シャルル・モーラスら「アクション・フランセーズ」一派の唱道した愛国的孤立主義などを思いうかべれば、シャルル・ペギーの「半月手帖」の姿勢ともまた大きく異なる、ジッドたちの文学的普遍性への志向、外国文学にたいする優遇が、それなりの限界と狭小を内包しながらも、初めての現代戦の予感に脅かされ、またそれを現実として体験した世代の新たな世界観に応える文学理解のあり方だったことを忘れてはなるまい。そして、芸術的な価値をなによりも優先するこの非党派性こそが、両次大戦間をつうじ「新フランス評論」が、フランス国内にとどまらず、汎ヨーロッパ的にも並ぶものなき存在として屹立することになった最大の要因だといってもけっして過言ではないのである。ただし同誌は、先行する「メルキュール・ド・フランス」のような外国文学のいわば総花的・百科事典的な俯瞰の提供をめざしていたわけではなく¹⁸⁾、中心メンバーや規則的寄稿者が個人的にいだく親近感や好奇心、あるいは多分に偶然に依存する人的接触をつうじて、そのつど臨機応変に外国文学

を摂取していったこと、またそれによって外国文学にかんする同誌の言説が逆に硬直化をまぬかれ、ある種の柔軟さを保ちえたことも同時に指摘しておくべきであろう。

周知のように、初期の「新フランス評論」がとりわけ熱い関心を示したのは、ゲーテやニーチェ、リルケに代表されるドイツの文学や思想であり、主としてヴァレリー・ラルボーの選択眼に導かれた、ディケンズ、メレディス、ハーディー、キプリング、スティーヴンソン、コンラッド、H・G・ウェルズ、チェスタートンなどのイギリス文学がそれにつづく。これらに比べれば、たしかにロシア文学は本来それに見あうべき幅広い待遇を享受していたとはいいがたい。新しい小説美学をめぐるグループ内部でさかんになり広げられた議論にしても、コポーの『カラマゾフの兄弟』戯曲化や、それに言及しながらジャック・リヴィエールが展開した「冒険小説論」に端的にあらわれているように、ほとんどがドストエフスキーに集中していたのであり、ジッドのドストエフスキーへの執着もこういった大きな流れと密接にむすびついていたのである。しかしながら、「新フランス評論」がトルストイを無視しうる作家と考えていた、そう見なすならば大きな過ちを犯すことになるだろう。むしろその存在の巨大さがかえって同誌をこの作家から遠ざけていた感がつよいのだ。たとえば、シュランベルジェはつぎのようなことばで、ドストエフスキーにたいして彼らが抱く親近感とは対照的な、トルストイへの近寄りがたさ、距離感をあかしているのである——「トルストイについては尊敬の念以外で語るべきではない。あまりにも大きな存在なので、称賛や非難といった通常の尺度ではとらえられないからだ」¹⁹⁾。

きわめて大まかなかたちながら以上に示した「新フランス評論」の同時代的なコンテクストのなかでは、『放蕩息子』をめぐる一件そのものはあくまで挿話的なレベルで語られるべき問題であろうし、またトルストイを敬遠しがちな同誌の態度がそれによってことさら加速されたとも思われぬ。だがこの一件が、ジッド個人の興味や探求心を色こく反映しつつも同時に、グループ全体にとり、2人のロシア人作家にたいする関心のありようにかんしてなにがしかのコンセンサス確認の契機になった、少なくともそのように推測することは許されるのではあるまいか。

註

- 1) ドストエフスキーに注目する記述は、早くから『日記』などに散見されるが、『書簡集から見たドストエフスキー』（初出誌「ラ・グランド・ルヴュ」, 1908年5月25日号）以後は、トルストイにたいする彼の優越性がいちだんと強調されるようになる。そのさいジッドの下す評価はほとんどつねに2項対立的で、トルストイの限界をその「直線的」な小説美学にもとめる一方、ドストエフスキー作品の複雑な「陰影」を称賛するというかたちをとる。「視点の多様性」を意図する『償金つかい』を執筆中の1922年にヴィュー・コロンビエ座でおこなわれた連続講演（初出誌「ラ・ルヴュ・エドマデール」, 1923年1月13日号から2月17日号まで6回連載）や、やはり同じ時期に『チボー家の人々』を執筆中のマルタン・デュ・ガールとのあいだで小説観の相違をめぐって活発に交わされた議論（voir André GIDE-Roger MARTIN DU GARD, *Correspondance*, Paris: Gallimard, 1968, t. I, l'introduction de Jean DELAY, pp. 72-88, et les lettres, pp. 167, 169, 352, 399-404, 417, 448-449, et les documents annexes, pp. 693-695）では、その傾向がとりわけ強く見てとれる。
- 2) たとえば、1972年頃までの主要業績をカバーするシラキウス大学刊『フランス文学の批評書誌』（*A Critical Bibliography of French Literature*, vol. VI, part I, Syracuse: Syracuse University Press, 1980）には「ジッドとドストエフスキー」を主題とする論文が7点収録されているが、トルストイとの関係をあつかったものは皆無である。また、同書誌をひきつぐかたちで作成された網羅性の高いサベッジ・ブロスマン編『アンドレ・ジッド研究文献の注解付目録（1973-1988年）』（Catharine SAVAGE BROSMAN, *An Annotated bibliography of criticism on André Gide, 1973-1988*, New York & London: Garland Publishing, Inc., 1990, coll. «Garland Reference Library of the Humanities» vol. 959）においても、ドストエフスキーとの関係を論じた研究20点にたいし、トルストイとのそれに触れたものはわずか2点だけ、それもマルタン・デュ・ガールとの関連についての言及にすぎない。
- 3) 河出書房新社版『トルストイ全集』（第18巻「日記・書簡」, 1973年, 281頁）による訳出引用。
- 4) デジャルダンの高等師範学校の同期生であるサロモンの略歴については、*Charles Salomon d'après ses lettres*, Nevers: Impr. Nouvelle «L'Avenir», 1927に付されたデジャルダンの序文（pp. 5-21）を参照。また、*Paul Desjardins et les Décades de Pontigny. Études, témoignages et documents inédits présentés par Anne HEURGON-DESJARDINS*, Paris: PUF, 1964, pp. 281-282には、サロモンの葬儀のもようが報告されている。
- 5) スラヴ学者サロモンの略歴や業績にかんしては、つぎの追悼記事を参照——André MAZON, «Nécrologie [de Charles Salomon]», *Revue des Études slaves*, t. XVI, 1936, pp. 313-316.
- 6) ジッド=コポー往復書簡集の校訂者であるジャン・クロードは、サロモンにかんす

る付注で、「新フランス評論」グループはデジャルダンの「真理のための同盟」で彼と知りあったと記している (voir la *Correspondance André Gide-Jacques Copeau*. Édition établie et annotée par Jean CLAUDE. Introduction de Claude SICARD. Paris: Gallimard, 1987, coll. «Cahiers André Gide» n^{os} 12-13, t. I, p. 411, note 3)。筆者もその可能性が高いと思うが、クロードが情報の根拠・出典を示していない以上、正確なところは未詳とする。

- 7) 校訂版は, *André Gide, «Le Retour de l'Enfant prodigue»*. Édition critique établie et présentée par Akio YOSHII, Fukuoka: Presses Universitaires du Kyushu, 1992, 265 pp. また, 同作品にかんする拙稿は5点あるが, とくに以下のものを参照されたい——«Quelques remarques sur la traduction rilkéenne du *Retour de l'Enfant prodigue»*, *Bulletin des Amis d'André Gide*, Centre d'Études Gidiennes (Univ. Lyon II), n^o 64, octobre 1984, pp. 621-625; «Essai de Bibliographie du *Retour de l'Enfant prodigue* d'André Gide», 北海道大学『言語文化部紀要』第15号, 1989年3月, 95-130頁; 『放蕩息子の帰宅』における象徴と解釈の問題——エリック・マルティへの反論——, 『ステラ』第8号, 1990年9月, 110-132頁。なお, 本段落の記述も多くは以上のものに依拠している。
- 8) 1912年1月14日付ジャン＝リシャール・ブロック宛書簡 (*Deux hommes se rencontrent. Correspondance entre Jean-Richard Bloch et Romain Rolland (1910-1918)*, Paris: Éd. Albin Michel, 1964, coll. «Cahiers Romain Rolland» n^o 15, pp. 99-100)。訳出引用には, みずす書房版『ロマン・ロラン全集』(第37巻「書簡 V」, 1983年, 90頁)を使用するが, 表記上の統一のため若干の改変をほどこした。なお, 同じ1月14日のロマン・ロランの日記では, 朗読のもようを伝える記述そのものははるかに簡略だが, 「フランス人」がサロモン, 「ジッドのある作品」が『放蕩息子』と明記されている——「サロモンはトルストイにジッドの『放蕩息子』をもっていった。トルストイはそれを我慢のならないものだといった。しかしサロモンがそれを褒めていたので, トルストイは気がとがめてもう一度読み返してみたが, 今度はもっとたまらないものだと思った」(同上『ロマン・ロラン全集』, 第39巻「書簡 VII」, 1982年, 388-389頁)。
- 9) 引用の出典は独立引用と同じ。なお, ロマン・ロランのジッド観について, 本稿では詳しく論ずる余裕がない。とりあえず, 両者の関係を包括的にあつかった Frederick John HARRIS, *André Gide and Romain Rolland: Two Men Divided*, New Brunswick, N. J.: Rutgers University Press, 1973, X-285 pp. を参照されたい。ただ, 『放蕩息子』にかかわるつぎの点だけは指摘しておこう。つまり, およそ1年後の1913年2月25日, この作品を表題に掲げ, 計6編の「トレテ」を収める合本(新フランス評論出版社, 1912年付, 出来は翌年。『放蕩息子』としては第3版)を贈られたロマン・ロランがジッドに宛てた書簡では, 「わたしは一度ならず「絵の一隅に描かれた奉納者」〔『放蕩息子』冒頭に登場し, 少なからず作者ジッドの分身として機能する存在〕をみとめ, 彼の倫理的な煩悶と知的な歓喜とをともにしました。とりわけ『放蕩息子』と『エル・ハジ』に心うごかされました。

これらは悲劇的で清澄な精神の産物です」(*Romain Rolland et La N.R.F. Présentation et annotation par Bernard DUCHATELET*, Paris: Éd. Albin Michel, 1989, coll. «Cahiers Romain Rolland» n° 27, p. 116) と、著者への礼状という性格を反映してか、簡潔ながら賛辞の表現にとどまっている点である。

- 10) Л. Н. Толстой, *Полное собрание сочинений*, Moscou-Léningrad: Édition d'État, t. LVIII, 1934, p. 445, note 991. 該当巻の「編集者」はこの手紙(原文はロシア語)を「1910年4月3日」付とするが、あきらかに誤り。ピエール・ミルにかんする別の付注 (*ibid.*, p. 444, note 980) に、やはり同じ編集者の質問に答えた1932年4月4日付のサロモン書簡が引用されていることから判断すれば、「1932年」の4月3日付か。いずれにせよ、そうとうの年月をへてからの回想であることは疑えない。なお、この資料の存在が「少なくともジッド研究者によっては今日まで指摘されたことがない」という表現は厳密さに欠けるかもしれない。というのは、不完全なかたちながら、筆者自身がすでに他稿において紹介したことがあるからである(拙論「アンドレ・ジッドの『放蕩息子の帰宅』——批評校訂版作成のための覚え書——」, 北海道大学『言語文化部紀要』第16号, 1989年8月, 167頁, 註42を参照されたい)。
- 11) ジッド宛1910年7月24日付未刊書簡, ジャック・ドゥーセ文庫蔵, 整理番号7782.1(封筒は保存されていない)。ヤースナヤ・ポリャーナから発信されたこの手紙の日付が新暦によるものであることは、朗読の翌日に書いたというサロモンの記憶と一致するばかりか、後述するように、ジッドがそれを新暦8月5日以前に受けとっていたのが確実であるのにたいし、旧暦7月24日は新暦の8月6日にあたり、これと時間的に矛盾することからもあきらかである。
- 12) Jacques COPEAU, *Journal 1901-1948*. Texte établi, présenté et annoté par Claude SICARD, Paris: Seghers, 1991, coll. «Pour Mémoire», t. I, pp. 482-483. ちなみにコポーは、1週間後の6月2日にワルシャワ経由でモスクワにむけて出発し、同市およびその近郊に8日間滞在ののち、ふたたびワルシャワ経由で16日、あるいは翌17日にパリに帰着している (voir *ibid.*, pp. 484-502)。こういった経緯から、サロモン宅の訪問は、コポーのばあいには、旅行にかんする情報やアドバイスを求めたためだったかとも推測される。
- 13) むろんジッド自身には、福音書の教えを歪めたという意識は毛頭ない。「断固たる異教徒的態度」を捨てられぬ自らの「矛盾」は認めながらも、歴史のなかで構築された教義の体系をとびこえ、キリストの真正なる福音を直接に聴くことで、だれよりも固くキリストと結ばれていると確信しているからである(括弧内は、1906年4月29日付クリスチアン・ベック宛書簡の表現。Voir GIDE, «Lettres à Christian Beck», *Mercure de France*, août 1949, p. 420)。なお、『放蕩息子』(プレオリジナル・初版から第3版まで)にたいする同時代の評価・反響にかんしては、前掲校訂版, 55-62頁および94-109頁を参照されたい。
- 14) ジッドの実験精神は、その両義的な遊戯性ゆえにしばしば、他者にたいしてばかりか自己にたいしても、なにがしかの攻撃性をはらまざるをえない。そして、まさにこの自虐的側面こそが、他者への全的な感情移入を可能にする「真の善良さ」と2

つながりに、ジッダ的「誠実」の奇妙な相貌を形成するのである。こういった点にかんしては、彼が同時代の作家・批評家から贈られた献呈本を競売に付すというスキャンダラスな事件を具体例にとりあげて論じた拙稿「蔵書を売るジッド——1925年の競売——」、『流域』第33号、青山社、1992年12月、14-21頁を参照されたい。

- 15) Lettre à Jean Schlumberger, du 5 août 1910, citée par Auguste ANGLÈS, *André Gide et le premier groupe de «La Nouvelle Revue Française»*, Paris: Gallimard, 3 vol. 1978-1986, coll. «Bibliothèque des Idées», t. I, p. 292. ただし同書は、サロモンが仲介役をつとめたことにはまったく言及していない。また、ジッド=シュランベルジェ往復書簡集はシュランベルジェの没後25年を記念して本年内にガリマール出版社から公刊の予定だが、校訂者であるパスカル・メルシエから筆者が受けた私信(1992年4月)によれば、同書簡集においてトルストイへの『放蕩息子』寄贈にかんする記述は、アングレスがその論述に溶かしこむかたちで引用する短い報告だけのものよう。
- 16) Voir la *Correspondance André Gide - Jacques Copeau*, op. cit., t. I, p. 415. なお、サロモンは後年「新フランス評論」の求めに応じて、トルストイの出家・死去にまつわる資料を翻訳・紹介している(«Documents sur le départ et sur la mort de Tolstoï», *La Nouvelle Revue Française*, mai 1925, pp. 516-538).
- 17) Voir la *Correspondance* ibid., t. I, pp. 409-416, 421, 424 et 430.
- 18) アルフレッド・ヴァレット編集の隔週誌「メルキュール・ド・フランス」には、ドイツ、イギリス、イタリア、スペイン、ポルトガル、アメリカ合衆国、スペイン系中南米、ブラジル、近代ギリシア、ルーマニア、ロシア、ポーランド、オランダ、スカンジナビア、ハンガリー、チェコなど、各国の文学の動向を伝える短信欄が常設されていた。同誌と外国文学の関係にかんする俯瞰については、つぎの論文を参照——Robert JOUANNY, «Les Orientations étrangères au *Mercure de France*», *Revue d'Histoire littéraire de la France*, janvier-février 1992, pp. 56-72. また、とりわけドイツ文学との関係にかんしては、つぎの単行研究書に詳しい——Andreas SCHOCKENHOFF, *Henri Albert und das Deutschlandbild des «Mercure de France»*, 1890-1905, Frankfurt am Main: Verlag Peter Lang, 1986, coll. «Europäische Hochschulschriften», 282 pp.
- 19) Cité par Auguste ANGLÈS, op. cit., t. II, pp. 234-235.